
異世界にて青年、魔法具を売る。

今ダ 果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にて青年、魔法具を売る。

【Nコード】

N2465BA

【作者名】

今ダ 果枯

【あらすじ】

祖母から受け継いだオカルトショップ(?)を営む山名 透。客は少ないが割りと満足した経営ライフを送っていたのだが。突然の大きな揺れ。気付くと異世界にいた。

1話、山名 透、光る蠅。

授業が終わると同時に山名 透は教室をでる。

「トオルー、映画、見に行こうぜ」

「いやあ、今日、よーじあるし無理ー」

「最近人付き合いわるいぞー」

人付き合いの悪さを指摘する、友人、赤井に透はカラッと渴いた笑顔を向ける。

「多分、当分は付き合い悪いと思うよ」

透は学校の裏門から抜け出し。とある店に向かう。

オカルトショップ、と言うよりはアクセサリー店や骨董品店の印象を受ける陰鬱げな雰囲気のお店。

一本、道を隣に行くと大通りで多くの人が賑わっているのだが。

その店が接する通りは静かで人は少なく裏通りに分類されるのが人目でわかった。

透は店の鍵を開け、シャッターを開き、掛札をひっくり返して、開店中表示する。

学校の制服を脱ぎ。店の奥のクローゼットから黒いズボン、シャツと腰に巻くタイプのエプロンを取り出し、それを着る。

カウンターにある背もたれの無いパイプ椅子に座り、今日も客を待つ。

「今日はお客さん来るかなあ？」

机の上に突っ伏しながら、一人ごちる。

うん、美少女がいきなりバイトさせて下さいとか。無いです

かねえ。

そもそも店の名前が良くないのかな。看板取り替えるのとか金掛かりそうだし。面倒臭いですし……。

オカルトシヨップ「不幸な黒猫」は高校二年生、透が祖母、山名茜から受け継いだ店であった。

客は少ない。2、3週に1人、運が良ければ2人と言った具合で、普通なら経営も成り立たないような状態である。

祖母の遺言により大金を手にした透はあまりお金のことでは困っていないかった。どちらかと言えば客が来ない方が問題であった。

確かに人気の店みたいに行列になるのは勘弁ですけど、1日1人ぐらいの割合で来てくれたっていいのになあ

「暇だなあ」

透は携帯を取り出してゲームでも始めようとしていた。

チリンチリンとドアにつけておいた鈴が鳴る。

入ってきたのは20歳前後の若い女性。

「いらつしゃいませ」

透は椅子から立ち上がり、軽く会釈する。

女性は店をゆっくりと何度も何度も回る。

どうしたんだろう。探し物かな。

そう思いながら透は声をかけない。

まあ、僕買い物の時は店員から声掛けられたくないタイプだから。

ただ、女性は何度も何度も狭い店の中を回るだけで、透も何か声かけないといけないかな？ と悩み始める。

こんなに店内に長くいる客は初めてだった。大体の客はフランクな感じで目当てのものが手に入れば、さっさと店を去る人が殆どだ

った。

困りました。接客とか勉強しとけばよかった。

「何か探しものですか？」

にっこりとスマイルを作る透。堅い敬語を使わなかった。付け焼刃の敬語で恥をかくのは何のメリットもないと思ったためだ。

「え？ ああ、はい」

女性は驚いたようで、そこで少しどもる

「いい感じの店だなあって思ってただけで、何か欲しいものがあつた訳じゃないんです」

「なるほど、うちはどうですか？」

「いい感じに落ち着く店だと思います」

「そうですね」

「はい」

女性が微笑み、透もそれに返して笑った。

その直後だった。店全体が大きく揺れた。縦横無尽に。

じ、地震!?

「きゃーー」

「大丈夫ですか!?!」

女性はその場できがみ込み、透は反射的にその女性に覆いかぶさっていた。

時期に揺れが収まった。

店は特に大きな被害も受けず、少しアクセサリーが散らばった程度であった。

しかし、透には大きな異変が襲い掛かっていた。

何だ、これ？

透の視界には、無数に飛び散る光るハエのようなものが見えていた。

1話、山名 透、光る蠅。(後書き)

現在、書きだめ23話まであります。それが切れるまでは毎日、1話か2話、投稿しようと思います。

評価や感想は作者のモチベーションに直結しますので、その気があればどうぞ遠慮することなくしていただけると幸いです。

2話、宇佐美 笹、心地よい。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

揺れだろうか？

ジワリと恐怖と何かが私の気持ちを支配する。

私は偶然、見つけた店、オカルトショップ「不幸の黒猫」にいた。

正直、散々な就活の日々に嫌気が差していた。

もう、正直、ニートになってもいいかな？ っと思ってた。

もちろん、そう思ったからって、そう言う行動が出来る訳じゃないのが、現実。

どこか遠くに逃げ出してしまいたかった。

散々な日々に、鬱屈としていた。

そんな時だった、「不幸の黒猫」を見つけたのは。

何と言うか、店の名前に惹かれた。今の心情は、自分の悲劇に酔っているヒロインの心情に似ているのかもしれない。

店は物静かな感じでウロウロしていても店員さんはほって置いてくれる。

自分の自由みたいな物を仄かに感じた。

もちろん、日々不自由だと思っっている訳じゃない。

ただ、この店ではそう言う自由とは別の自由を感じた、狭い自由と言っべきか。なんとも詩的な表現である。

店員さんは20歳ぐらいだろうか、ほっそりとしていて、何と云うか、線の細い系男子（？）って感じで、イケメンとまでは言わないが普通にかっこいい男の方だと思う。身長は随分、高そうだ。立ったら180センチぐらいはありそうだ。

店員さん、特にこちらに干渉してこようとする様子はない。いい店だと思った。

何かを買いに来た訳じゃない、何かを買うつもりも無かった。冷やかした。

何週も何週も狭い店の中を、回っていると、唐突に声を掛けられた。

さつきまで、ほっとして欲しいと思っていたのに悪い気はしなかった。店員さんの声も透き通る感じのいい声で心地よかった。

私が笑うと、店員さんも笑い返してくれた。何とも、うん、魔力というか魅力のある笑顔だと思う。

儂い。

その時だった、店全体が揺れた、縦横無尽に、と表現するのが適切だと思う。

やたらに揺れた、ちょうどミキサーにいれられたら、こんな感じじゃないだろうか？

揺れたというより、半ば回ったといった方が正しいかも知れない。

私は叫んだ。

店員さんは私に覆いかぶさった、心地よいと思った、安心感があった。

不謹慎ながら私は大きな揺れに、恐怖しながら……少し「ワクワク

ク」していた。

そうだな、ちょうど、絶叫系のジェットコースターに乗るような気持ちに似ていると思う。

2話、宇佐美 笹、心地よい。(後書き)

1話1話が短いと感じる人がいるかも知れません。すみません。
1話のタイトルは「話、語り部、1つ単語」と言う形にしよう
と思います。

作者が side、誰 と言う表現法を使うことが苦手な
めです。(読む分には全然気にならないのですが)
ので一話、一話タイトルをチェックしていただくと読みやす
くなると思います。

誤字脱字の報告は気軽にしてください。見直してはいるので
が自分ではなかなか気付けないことが多いので。

3話、宇佐美 笹、痛い子。

「だ、大丈夫ですか？」

何と言うか、この店員さん、やっぱり線が細い。

「はい、その……大丈夫です」

「何じゃこりゃー!!」

外から大きな声が聞こえる。

古いネタだなあ、誰かが太陽に吠えている。

「どうしたんでしょうか？ 外で何かあったのでしょうか？」

私は店員さんに尋ねてみるが、店員さんは何故かほづけて、宙を見据えている。

「あの？」

「な、何ですか？」

私は少し驚く。ちよつとビクツとした。

「何か、光る蠅のようなものが見えませんか？」

「いえ、何も見えませんが？」

「どうしたんだろうか？ 痛い子？」

重度の厨二病？

「すいません、変な質問をしてしまって、ちよつと頭を打ってしまいました、変な感じがして」

「大丈夫ですか！？ その、私を庇って」

何か申し訳ない。さっき思ったことを取り消したい。

「いえ、大丈夫です、頭を上げたとき後ろの棚で打っただけです
から」

店員さんはカラカラ快活そうな渴いた笑いを作る。実が伴っていない笑顔なのが、安心する。

「また揺れが来ても困りますから、さっさと外に出ましょう」
「あつ、はい」

「店員さんは立ち上がり店のドアを開こうとする。
ガチャガチャとドアノブを回すが開く様子がない。
シーン」

「困りました、開く様子がありません」

「そうですね」

「淡々と状況を告げる店員さんに、私は少し困る。」

「少し建て付けが悪かったんですよ、このドア」

「バツが悪そうに言い訳をする店員さん。少し好感がもてる。」

「そうみたいです」

「何故か店員さんはいつも笑顔だ、営業スマイルとはまた違うのだが、何と云うか可愛さとかを感じさせない笑顔。」

「少し離れていてください」

「え？」

「バンツ！！」

「店員さんはドアを蹴破った！！」

「実況しなくてもいいですよ？」

「少し、驚きました」

「本当はかなり驚いたのだが。」

「そうですね？」

「なかなか、ワイルドな店員さんですね！」

「そうですね？　そうですね、お客さんは少し嬉しそうですね」

「私は少し嬉しいのだろうか？」

「違う。」

「私は少し「ワクワク」しているのだから。」

「外にでた瞬間だった。」

「今度は凄く驚きました」

私は啞然とした。ここまでとは。

「そうですねえ」

店員さんはいつも通りニコニコしている。驚きがあまり伝わってこない。

新車のポーカーフェイスと言う奴だろうか。

外に出ると、森が広がっていた。

瓦礫が転がり。苔むした地面のところどころに、アスファルトが浮き上がっている。

両隣にあった自転車屋は半壊、パン屋は木が貫いていた。

何より、一番驚いたのは、金髪の感じの悪い刺青をした、四十代ほどの男が、緑のシワシワとした肌を持つ小さな化け物……

ゴブリンのような化け物に襲われていることだった。

3話、宇佐美 笹、痛い子。（後書き）

この話は結構だらだらしている所があります。

基本、書き溜めが在るぶんは毎日22時か23時に投稿しようと思つのでよろしく願ひします。（作者の事情にもよりますが基本23時に投稿しようと思ひます）

明日は休日なので12時に一話、23時にもう一話投稿しようと思つてます。（上に書いた法則からされる場合は、このように前の話の後書きで出来るだけ明記するようにしたいと思つてます）

4話、山名 透、ズルズル。

「すみません、あれは何でしょうか？」

僕は少し自分の無知を恥じた。

あんな、緑のシワシワとした肌を持つ腰ぐらいの高さの人型の生き物、始めて見た。

少なくとも動物園や図鑑ではあんな生物、見たことがない。

「すみません、私も良くわからないのですが、おそらく『ゴブリン』と呼ばれるものじゃないでしょうか？」

お客様の言葉で余計に、あの生物の正体がわからなくなった。

「すみません、芸能人とか疎くて。新手的アイドルとか、そういうのでしょうか？」

ゴブリン？

「その、少しひどいことを言いますが、私の目には随分、不細工な緑のシワシワに見えるんですか？」

お客様は、こつちを見詰め少し可笑しそうに笑う。

「えーと、店員さんはゲームとか、やらないんですか？」

「はい、携帯ゲームをたしなむ程度で」

少し恥ずかしいな。後頭部をかく。

「インターネットとかも、あまりやらないので」

「とても、現代人とは思えません」

お客様は絶滅危惧種でも見るような、驚愕の目でこちらを見る。

「その、どう説明したらいいのか」

お客様は少し難しい顔をする。

「そのゴブリンって言うのは架空の生物で、人間を襲うモンスターに分類される生き物で……」

「ああ、ハリー・ポターで出てくる、屋敷しもべ妖精が凶暴化し

たよつなものですか？」

「そうです！ ちょうど、そんな感じですよ！」

お客さんの中でじっくり表現だった様で結構満足している。

なんか、今の僕は人前な所為か気分が敬語的だと思う。
正直疲れる。

「あの店員さん、助けませんですか？」

お客さんに聞かれた。

「あ、僕の名前、山名 透っていいいます」

「トオル君ですか？ ヤマナさんですか？」

「どっちでもいいです」

「私は宇佐美 笹です」

お客さんも名乗ってくる。まあ、こっちが名乗ったので名乗り返したただけけど。

「じゃあ、ササさんは呼びにくいので、ウサミさんって呼びますね」

「はい、あつ、でも、さん付けじゃなくていいですよ？」

「失礼ですが何歳ですか？」

「失礼ですねえ、22歳です」

失礼と言いつつも、年齢を覚えてくれるウサミさん。ギャグキヤラなのか？

「僕は18歳なので、やはり、さん付けになりますね」

「うそ！ トオル君そんなに若いんですか？」

「そんなにって言うても、四つしか変わりませんよ？」

あと、年下だったからだろう、僕の呼び方はトオル君に決定しようだ。

「あつ、死んじやいましたね、ヤクザっぽい人」

ウサミさん、人が死んだのに軽い。

「そうですね、まあ、棍棒で四方八方から殴られたらヘビー級ボクサーでも一分も持たないんじゃないでしょうか？」

ヤクザっぽい人がズルズルと引きずられて行く。

やっぱり、ゴブリンは人間と同じで雑食なのだろうか？

人間も食べるのだろうか？

「ゴブリンさん、ヤクザさんをお持ち帰りですかねえ？」

「テイク アウトですね！」

ゴブリンはズルズルとヤクザさんの死体を引っ張っていく。

「ウサミさん、少し楽しそうですね」

「不謹慎ですか？」

「そうじゃないでしょうか？」

暫定ヤクザのような人、略してヤクザっぽいとは、血痕を残して森の中に消えた。

4話、山名 透、ズルズル。（後書き）

基本、前書きは使わないようにしようと思ってます。

作者が携帯で小説を読むときに前書きが邪魔だなあって思ったりすることがあるからです。

あと、基本後書きは毎回書くことと思います。これも携帯で閲覧するときあったり無かったりすると「うーん」って思ったりするためです。

5話、宇佐美 笹、魔法。

「やっぱり、あの人、ゴブリンに食べられちゃったのかなあ？」

私は今更ながら怖くなってきた。

ただ、怖くなったが、「ワクワク」も増していた。

現在、私は「不幸な黒猫」の2階の生活空間にお邪魔させて、貰っている。

トオル君はとりあえず店の整理と少し周りを見回ってくると言うので、一旦ここを出て行った。

「異世界トリップ……ふふふ」

私は今おかれた状況を恐怖しながら堪能していた。

多分、私一人じゃあ、泣き崩れてゴブリンのエサになっていたと思う。

「それが今、僕達が置かれておる状況ですか？」

「と、トオル君！」

音もなく、後ろには家主が立っていた。

さつきまでは付けていなかった、モノクル……片眼鏡や腕輪をつけている。

「そろそろ、夜になります」

「あ、はい」

「と言うか、もう暗くなって来てます」

「そうですね」

「正直困りました、電気も水道もガスも駄目です」

「やはり、そうですね」

「異世界トリップと言うものについて説明して欲しいのですが」

うん、まあ、この子、ファンタジーとか疎いんだよ。

現代人とは思えないほど、うとい。

「異世界トリップって言うのは、言葉通り異世界に転送されたり、

何かの原因で偶然、異世界に迷い込むことを言います」

「タイムスリップみたいな物でしょうか？」

トオル君、何かズレてる。

「似ていますが、全然違います」

「はい」

「要するに、異世界トリップって言うのは、ファンタジーの世界に迷い込むことを言います」

トオル君は首をかしげる。

「本や漫画の世界に迷い込むってことですか？」

「さつきよりは近くなりました、とりあえずそういう感覚でいいです」

一々、根本から説明するのは骨が折れる。

せめて、ファンタジー系のゲームをやったことがあったら、説明は早いのだが。

「えーと、じゃあ、例えば理由と言うのはどういうことが理由になるのでしょうか？」

「作品にも寄りますけど、だいたい、テンプレ的には、どこかの国の王様に召還された、とか、神様やそれに準ずる存在に何らかの理由で異世界に行くように提案、または強制されるっていうのが、大體の流れです」

「成る程」

トオル君は考え込む。

「神様の方は置いておいて、何故、王様は異世界から人間を召還するのですか？」

「えーと、大體は召還される側の人間に勇者とか絶対的存在になる資質があつて、旅に出て魔王とか人間を敵対するものを、倒して欲しい、と言うのが理由です」

「うん、なるほど」

「異世界トリップの場合は大體、中世ヨーロッパぐらいの文化レベルをイメージしたいと思います」

「女王やら騎士やらですか？」

「そうですね、あまり科学が進歩していなくて、その代わりに魔法が発達していると言うのが相場ですね」

「ウサミさんの知識は凄いですね」

「あなたが何も知らない過ぎるだけです！」

「魔法って言うのは」

「あつ、魔法の説明は大丈夫です」

「はい」

「映画とかで見たことがありますし、それに……」

「そこでトオル君はそこで後ろポケットを探り出す。」

「それに？」

「指輪をはめる。」

「どうやら、僕、魔法が使えるようです」

そういつて彼は暗闇の中人差し指の上に小さな火を灯した。

5話、宇佐美 笹、魔法。(後書き)

テンポはどうでしょう？ 作者自身は遅い方だと思っんです。

テンポの速い作品なら5話で「ギルド」とか出てきたり初戦闘ぐ
らいは終わってると思っんです。

テンポの遅い作品ですが付き合っただけだと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2465ba/>

異世界にて青年、魔法具を売る。

2012年1月9日23時52分発行